

機能解剖で斬る 神経系疾患 第2版

中野 隆【編著】

評者

祖父江 元

名古屋大学大学院医学系研究科神経変性・認知症制御研究部特任教授

本書のタイトル「機能解剖で斬る神経系疾患」に著者である中野先生の考え方が凝縮されている。神経解剖の基礎・原理を知ることによって、神経疾患の診断・治療という応用問題を解きほぐすことができるということが示されている。我々も医学生の際を思い出してみると、解剖学や解剖実習は医学的なものとの最初の出会いであり、記憶する学問であるという印象が強い。神経解剖の重要性が分かってくるのはむしろ、医師になり目の前の患者さんの症候と向き合って、どう診断し、どう治療を進めるのかという場に遭遇してからである。この時に初めて「解剖学(医学)は暗記ではない。数学と同様に考える学問である」という中野先生の言葉が身に染みるのである。前書きにも書かれているが、中野先生は神経内科実習での患者さんの診療体験から神経症候を機能解剖で解明する実体験を持たれ、応用問題として神経解剖の重要性を実感されている。このことがこの教科書の大きな背景になっている。まさに臨床の視点から見た神経解剖のエッセンスは何かという考え方が全編に溢れている。我々は思わずこれが解剖の書であることを忘れて、物語のよう

に読み進んでしまうことに気づく。これが本書の大きなコンセプトであり、特徴である。

いろいろな工夫やカラクリが散りばめられており、学ぶ楽しさを伝えたいという熱気が伝わってくるのである。

どのページを開いても「nakano」と小さく記入された図に出会う。これは中野先生が作られた“原図”であり、神経解剖の原理を何とか伝えたいという思いが伝わってくる原図である。ひとつひとつの図には中野先生の工夫が織り込まれており、これらの図を見るだけでも本当に楽しい書になっている。例えば視床について見てみると視床痛、不随意運動、運動失調、視床症候群など症候を起こしてくる視床の共通機能・原理を踏まえて、これらの症状をシステミックに捉える図が呈示されて、そこには小さな「nakano」のサインが見られる。

実際の臨床の具体例を挙げることで神経解剖の意義やその理解を進めようという工夫が至る所に見られる。尿失禁の分類と神経支配、呼吸調節に働く筋とその神経機構、重症筋無力症と Lambert-Eaton 症候群の鑑別に関係するメカニズム、散瞳・縮瞳をきたす病

態と神経支配の関係など、おびただしい数の臨床実例と解剖の関係が挙げられている。豊富な事例の記述からむしろ研修医や専攻医やさらには脳神経内科医が神経解剖学の重要性を認識する書にもなっていると思われる。

加えて、珠玉のコーヒープレイクが大変良い彩りを添えている。

中野先生の解剖学教室では、毎年解剖実習を行う学生の何人かが解剖実習に加えて、独自の研究テーマを見つけて独自のデータを集め、解剖学会などで学生発表を行っていると聞いている。そこには学生達が積極的に自らの意思で、自らの興味で解剖学を勉強し研究している姿が浮かんでくる。本書を読むと、このことなるほどと思われてくる。解剖学を「なぜ」という問いから考える学問にするという流れが見えてくる。解剖学が生き生きとした学問に変わることを体験できるように思う。まさに神経解剖を学ぶことの意義が見えてくる。

本書は神経解剖を初めて勉強する医学生とともに、脳神経内科や脳神経外科、精神科、リハビリ科、整形外科など神経疾患あるいは精神疾患の臨床現場に関わる全ての方々にぜひ勧めたい解剖書である。

B5 判・頁 408

2018 年 3 月

定価：本体 6,000 円＋税

【ISBN978-4-907347-65-9】

メディカルプレス刊